

2025年度 第35回 こうさい療育・支援セミナー

基調講演

幼児期の育てのテーマ

総合福祉センター弘済学園

堀由美

入園前（幼児期）に伺う 親たちの困り感・気がかり

我が子の見せる行動の中に、何らかの気がかりを、ひたひたと感じ続けてきた親たち

- ・ 家庭生活・社会生活の中で
- ・ 地域での週1回親子療育利用、あるいは週1回個別療育利用する中で

その「何らかの気がかり」を、打ち消しながら歩んできた親たちでもある。

ネット検索すると『脳の機能障害』といった言葉とともに様々な情報に触れ、

「治る・治らない」といった類のものではないと知りつつも、

人知れず「ここに通えば、もしかすると・・・」という思いを抱きながら、

児童発達支援（毎日通園）の扉をくぐる選択をしてきた現実がある。

入園前の親たちが語る困り感・気がかり

領域	症状	
からだ	オムツ内排泄 偏食の強さ 睡眠が整わない	多くの親が語る領域だが、具体的な課題症状はほぼこの三つに集約される。
認知 ことば	ことばの遅れ 手先の不器用さ こだわりの強さ 興味関心の偏り	圧倒的に多いのは「ことば」に関する気がかりになる。『ことばがないからコミュニケーションが取れない』『ことばがないから分かってあげられない』という内容を語る親が多い。 ことばの気がかりに次いで、不器用、こだわり、興味の狭さ等、感覚由来の適応行動の取れなさ・未熟さを語る親が多い。
コミュニ ケーション 社会性	一方的な関わり 集中力がない 待てない 落ち着かない 集団行動がとれない 他児と遊べない 融通が利かない 我慢できない 痾癢・パニック	『ことばがあればコミュニケーションが取れる訳ではない』ことが語られることが多い。会話ができたとしても、適応的な行動がとれずに社会的活動を阻んでいる実態を語る親が多い。 買い物、公園、子育てサロン、プレ保育、病院・役所窓口等社会生活との接点を持つことの困難さも色濃くなっていく。 ☞ ・「謝ってばかりで、結局、母子で引きこもり」と語った母 ・外出は『バギー＆スマホ』が必須アイテムという4歳児 ・「健診会場で他の子を見て『1歳半ってこんなにお話し聞けたんだ』と愕然とした」と当時を振り返って語った母

療育を通して見えてくる子どもたちの姿①

- ・ 当園に繋がってくる幼児の多くは未診断にある。
- ・ 未診断ではあるものの、日常支援でのアセスメントを通して見えてくるのは、発達遅れと自閉スペクトラム症を合併した場合の症状・行動等を見せる幼児の多さ。

☞特に、

- ・ どの子ども、自分の好きなモノ・コトをはっきりと持ち、それに向けては貪欲に学び、且つ一人で試行錯誤していく学習スタイルを持つように見受けられる。
- ・ 自分の好きなモノ・コト以外に対しては、無関心・興味の薄さ、あるいは嫌悪を抱きやすい子どもたちのように見受けられる。
- ・ 過去の記憶が色濃く付きまとい、その記憶の塗り替えができずに苦しい思いを抱えやすい子どもも少なくない。

「どの子ども、自分の好きなモノ・コトをはっきりと持ち、それに向けては貪欲に学び、
且つ一人で試行錯誤していく学習スタイルを持つように見受けられる」という姿について

【例えば、こんな姿・行動がありました】

- ・ 教えていないのに、いつの間にか文字を読めている。書いている。
- ・ ある時、時計が好きになり、クリスマスプレゼントのリクエストは「壁掛け時計」。時計の絵を描くうちに数字を覚え、折り紙工作でもひたすら腕時計を作って腕に巻き、ハサミやセロハンテープといったものの扱いも知らない間に上達している。
- ・ 夏野菜の「おくら」が好きで、「島おくら」と「六角おくら」の違いを自分感覚で細やかに説明してくれる。（でも、超偏食で食べることはしない）
- ・ 上着のファスナーを留めようとするが、うまく噛み合わずに苦戦しているのでやり方を教えようとするのを断固拒み、とにかく一人でやろうとする。

「自分の好きなモノ・コト以外に対しては、無関心・興味の薄さ、あるいは嫌悪を抱きやすい子どもたちのように見受けられる」という姿について

【例えば、こんな姿・行動がありました】

- ・「島おくらと六角おくらの違い」を語るのに、「レタスとキャベツの違い」は分からない。気にも留めない。なんとも思わない。
- ・誘いに対しての第一声は「やめとく」「やんないの」

「過去の記憶が色濃く付きまとい、その記憶の塗り替えができずに苦しい思いを抱えやすい」という姿について

【例えば、こんな姿・行動がありました】

- ・半ズボンを履いている時に転んでひざを擦りむいて以来、『半ズボン＝転ぶ』が強烈にイメージ付き、半ズボンが履けなくなった。
- ・ひとたび『怖い』という思いを抱くと、それに凌駕されてしまい自分からは身動きできない。

こういった姿や行動は、『特性』という言葉で言い表されることが多い。

あるいは、『こだわり』『決めつけ』という言葉で語られることも多い。

→この3つの姿・行動は、

幼児期ばかりでなく、その後のライフステージにも響いていく姿・行動になる。

⇒同時に、この3つの姿・行動は、関わりポイントの3大柱にも通じていくと考える。

特性やこだわりと語られる側面を、関わる側がどう捉えていくのか。

どういう目線を以って向き合っていくのか。

《本人支援の核になっていく》



「本人支援の核になる」ということは、3つの姿・行動への理解や関わり方によって、

「育ちの方向性がいかようにも変化していく」ということを指し示す。

本人の姿・行動に『無理解な環境の下』で、『無理のある子育てや支援』を

注がれ続ける結果としての二次障害に繋がらないために、あるいは、

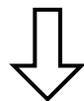
二次障害を解くために欠かせない育ての視点がある。

療育支援を通して実感してきた『育ての視点』とは、

☞ 発達支援を必要としている子どもたちは、

- ・ 他者と物事を共有することの難しさを抱えている
- ・ 他者と情動を共有することの難しさを抱えている 等

『他者との共有に困難さを抱えている』子どもたちになると捉えてきた。



だからこそ、「人によって快を注がれる必要がある」として、
《人を注ぐ》ことを本人支援の基軸としてきた。

療育を通して見えてくる子どもたちの姿②

- ・子どもたちと向き合い、子どもたちを知る中で、社会性やコミュニケーションといった領域もさることながら、実はどの子にも『からだ』に課題があること・課題が残っていることを強く実感してきた。

⇒受給者証申請に当たり、発達検査が実施されている。

その結果としては、『姿勢・運動』領域では「生活年齢相応」もしくは「若干の遅れ」といった段階にある児が多いが、療育を通して感じることの筆頭として、身体機能面や感覚面の未発達さを挙げたい。

- ☞幼児期なので、身体機能面や感覚面の未発達さを持つのは当然のことではあるが、それまでの成育歴から何らかの影響があることを感じずにはられない。

聞き取り面接で見えてくる赤ちゃん時代の様子

- ・マイルストーンの飛び越し・駆け抜け・逆転の多さ

例) 「ずり這いは、ほぼしなかった」 (飛び越し)

「ハイハイしなかった」 (飛び越し)

「ハイハイしたと思ったら、すぐにたっちして、歩いた」 (駆け抜け)

「首座りと寝返りがほぼ同時」 (駆け抜け)

「首が座る前に寝返った」 (逆転)

「ハイハイ8か月、つかまり立ち6か月」 (逆転)

- ・「赤ちゃんのころは、よく寝る子だった」

「大人しくて育てやすい赤ちゃんだった」

「赤ちゃんの時は手がかからなかった」といった母親の振り返りの声も実に多い

☞ 乳児期に『育てやすかった』と言われていた赤ちゃんたちの姿が、

幼児期に入ってくると、聞き取り面接の中で何う行動・症状に変わっていく。

《どこかのタイミングで、困り感・気がかりに繋がっていく事実がある》

療育を通して見えてくる子どもたちの姿③

幼児期にある子どもたちの療育実践を通して実感してきたこととして、

- ①安心・安全を最優先に注ぎつつ、
- ②発達段階に則しながら、
- ③『強み・楽しさ・快』といったキーワードに留意した、
- ④適切な課題・プログラムを以って活動していくことを通して、

特性やこだわりといったものからくる味・色合いの濃さを持ちながらも、
実にゆっくりと定型的な発達の道筋をたどっていく子どもたちの姿があった。

療育を通して見えてくる子どもたちの姿④

実にゆっくりと定型的な発達のだ筋を辿る一方で、
超えることの難しい壁のようなものがあることにも出会ってきた。

- ⇒ ・ 意図を共有することの難しさ
- ・ 『同じ』ということを理解することの難しさ

【例えば、こんな姿・行動がありました】

- ・ マット運動場面：掌を握った高這い姿勢だった。言語指示では掌を開く意図が伝わらず、見本を見せると模倣して掌を開いて着けた。できていることを褒め、「グー（Good）だよ！」の言葉に反応し、再び拳を握る。
- ・ 発達検査場面：新版K式『積み木：トラック』課題
積み木でトラックを作る手指の巧緻性は有しているものの、「同じモノを作る」意図が伝わらず、且つ、検査者が見本に作ったトラックが「欠けのある立方体」として映り、その欠損部分に積み木を積み重ねていく。

☞ クラス活動に馴染み、適応的な行動が引き出されていく経過を目の当たりにしつつも、「分かること」と「できること」が乖離する姿・エピソードにも多く出会ってきた。

ただ、この姿こそが、彼らの独自の学習スタイルとして存在することになり、また一方で、それが時に他者との共有ぬきで、独自に『できる力』を伸ばしていく姿にも繋がっていくことを実感している。

- ・ こうした『特性』と表現される学習スタイルを持ちつつも、この先の育ちは未知にある。
- ・ だからこそ、個に配慮した中でいろいろな体験を無理なく進め、

それを人と共有する中で「気付き」に繋がりたい。

⇒ そのためには、その子にあったやり方、分かり方を探る必要がある。

その子が理解できる伝え方を考える必要がある。

その子のことを知り、関わり、向き合う必要がある。

そのためにも、改めて【子どものこころの発達】を覗いてみたい。

その中で、目の前にいる子どもたちにとって、今だからこそ大切なことを考えたい。

子どものこころの発達

●三つ子の魂百までも

人は、幼児期に形作られた性格や習慣、価値観は、そのあとの人生にも大きく影響し続けるという意の諺になる。

☞「人は、生まれてから3歳までに注がれたものを核にしながら大きくなっていき、それは生涯を通じて変わらない」という意を含む言葉になる。

昔の数え年を当てはめて考えると、今の3歳より1～2歳下の年齢になる。

☞**生後1歳半までの子どもが見せる姿・行動に、とても大事な育ちのテーマが隠されているのではないかと考えてみたい。**

【1歳半】までを辿る

● 0歳児の世界

- ・母胎という無重力下で様々な動いていた身体を、重力に抗って自ら動かしていく。
- ・その動きには秩序はなく、感覚と運動を頼りに、手当たり次第に身体を探究し続け、動いては休むことを繰り返しながら、自分を取り巻く世界を認知していく。
- ・まだ自分から外界へ意図をもって働きかけることはできず、自分を取り巻く秩序のなさは「不快だらけ」からの出発だが、その不快さを取り除こうと手間をかけ、ことばをかけ、あやしてくる大人の働きかけ（育児）によって、その不快さは都度取り除かれて「快」に変えられていく。
- ・この『不快から快へ』の幾千もの営み（大人との関係）が、養育者との間に結ばれる基本的信頼関係、共感関係への扉となっていく。

● 「見る」ことと「モノを探索する」こと

- ・ 生後3か月頃の定頸によって、『注視』が確かなものになっていく。
- ・ 自分から外界へ意図をもって働きかけることができなかった新生児だが、定頸によって意図をもって外界に働きかけることが可能になり、その働きかけは『モノを見る』ことから始まる。
- ・ 定頸によって獲得された注視は、「もっと見たい」という思いによって推し進められ、それが手を伸ばしてモノを触り、確認する・遊ぶという行為を引き出すことに繋がる。
- ・ 生後5～6か月頃、「もっと見たい」「もっと触りたい」という思いが外界のモノを探索する行為をより深めていくことになり、寝返りの獲得に作用する。自分の手・脚にも気付き、存分に身体を動かすことで『自分』を探究することも進んでいく。見ること・動くことが原始反射の統合に作用し、この先の生活に影響を与えることにもなる。
- ・ 併せて、この後の座位の獲得によって手の自由度が増すことがモノの探索・探究に繋がり、そこでの試行錯誤を通して目的と手段（物事の因果）に気付いていくことに繋がっていく。

● 「見る」ことと「ヒトを探索する」こと

- ・ 新生児の目に映る「ヒト（大人）」は、“赤ちゃんが自分を見ている”と気付くと見つめ返し、微笑み返し、近寄り、声を掛け、抱き上げる等、幾重にも関わりを注ぎ、赤ちゃんのからだ・こころを満たしていく。
- ・ この働きかけが、新生児の関心をより惹きつけ、大人（ヒト）というものが特別な対象と認識されていくことに繋がり、新生児はヒトの姿・動きを選択的に、熱心に見るように変えられていく。
- ・ ヒトを選択的に熱心に求める行為が、ヒト（大人）と二人三脚でモノを探索すること（ヒトとモノであそぶ）に繋がり、人同士の社会的な交流に繋がる土台になっていく。

●見える世界の変化

- ・ 座位の獲得によって視座は一気に高くなり、目に見える世界は大きく変化する。外界に対する「もっと見たい」「もっと触りたい」「もっと近づきたい」という思いが、自ら姿勢を変えていくことに繋がり、『もっと、もっと』という動機が座位↔四つ這い↔ハイハイといった運動発達を押し進めていく。
- ☞ 姿勢の変化が視座の変化を生み、視座の変化が運動の変化を生んでいく。それまで「面と高さ」だけだった空間世界に「奥行」が加わり、三次元の世界で物事を捉えていくようになる。
- ・ 「もっと触りたい」という願いによったモノの探索は、『自分だけの行為』とも言えるが、そこにヒト（大人）の存在が入ることによって『二人三脚の行為』へと質を変え、『一緒に』『共に』ということが可能にしていく。大人との二人三脚によって、自分が起こす行為は褒められ、称賛され、より快な行為へと色味を帯びることになり、ここに共感・共有が生まれていく。

●二人三脚は、『共同注意』に発展していく

- ・モノを探索することは『自分-モノ』の二項関係になり、ヒトを探索することも『自分-ヒト』の二項関係になる。この二項関係の営みが、二人三脚で外界と繋がることを通して『自分-モノ-ヒト』の三項関係への入り口になっていく。
- ・三項関係は、共同注意（Joint Attention）そのものになる。
そして、ここに意図的な『間』が生まれていくことになる。
- ・共同注意が成立し始める生後10か月～1歳頃の「もっと見たい」という思いは、「もっと近づきたい、もっと高い所から見たい」という願いによって四つ這い⇔つかまり立ちという姿勢変換を促していく。その際の二人三脚のやり取り・遊びによって、子ども側では大人への愛着をより深めることとなり、大人側では子どもに対する絆をより深めることとなる。

- 三項関係でのやり取りを通して、気付きが共有されていくことへの喜びを感じ、姿勢運動機能の「もっと、もっと」ばかりでなく、認知機能においても「もっと、もっと（知りたい）」がモノや環境への探索・探究をより深め、指先（指差し）を通した大人とのつながり（間）が成立することで、目に見えない共有が更に深まっていく。
- こうした、モノをコミュニケーションのツールとして活用する中で、乳児はそのやり取り（共同注意）に自然に巻き込まれ、ヒト・モノに対する関心を更に高めていく。

●自分を取り巻く世界のつながりに気付く

- ・つかまり立ち～伝い歩き～独歩といった直立での二足歩行を獲得していく時期（1歳～1歳半）は、三次元で身体を操作するようになる。
- ・生活の中で、いろいろな経験が重ねられていく時期になり、それを通して『時間・空間のつながり』が形成され、『自己と他者の意図のつながり』が生まれる時期に重なる。

時間・空間のつながり：「お片付けするよ～と先生が言ったから、次はおやつだ」

「先生がリュックを取ったから、そろそろ散歩だな」

「お母さんが鍵を持ったから、買い物に行くぞ」

⇒経験から次を見通す『時間的なつながり』を理解する。

つながりを理解し、それを察知して行動したりする。

自己と他者の意図のつながり：他者の意図に気付いて受け止め、その他者に褒めて欲しいという要求が生まれる。

⇒その一方で、相手の意図に反して自分の意図を押し通す

「自我」も見られてくる。

【1歳半まで】を辿る中で気付く「困難さ」

- ・人は、大概すると『からだ』→『認知・ことば』→『社会性・コミュニケーション』の順でピラミッド様に、且つ、それらは連関しながら発達していくことが分かる。
- ・それは大人からの全面的な養護から始まり、相互的な、社会的な交流へと広がりを見せる。その過程を概観すると、連綿と続く子育て・保育・支援の中で、どの時期にも人との関係性にまつわるキーワードが、「共有」「二人三脚」「二項関係」「三項関係」「共同注意」等といった言葉となって登場することに気付く。
- ・発達支援を必要とする子どもたちは、ここに困難さを抱えていて、親たちが子育てする中で感じてきた『何らかの気がかり』の中身には、このキーワード群が作用していることを覚える。

「1歳半の世界」をどう支えるのか

連綿と続く子育て・保育・支援の中で、
『人との関係性』をいかに育てるのが【幼児期のテーマ】になる



そのためには、まずは人への気付きを育てること



そのためには【人を注ぐ】ことを通した発達支援の必要がある

【人を注ぐ】そして、発達を支援する

●人を注ぐとは～幼児期の療育の中で、具体的には何を指すのだろうか？

- ・ 幼児期の療育は、限られた期間の中でいろいろなことを経験し、味わい、学んでいく時期・場だからこそ、整理された環境の中で、子どもに合わせた支援を注ぐことが必要
- ・ 更には、共同注意のプロセスにおける困難さ・課題を踏まえた上で、それを意図した支援、働きかけを注ぐことが必要

- 困難さの例)
- ・ 指差しした後、相手のことを見ないという姿がある
 - ・ 相手の視線の先を追えないという姿がある
 - ・ 相手と何かを共有することが難しいという姿がある

☞だからこそ、まずは『注目』を促すこと。

でもだからと言って、乳幼児期は視覚支援中心の関わりをしていくのではなく、快の関わり・生のやり取りをしっかりと注ぐこと。

社会性に向き合った療育活動を丁寧に注ぐこと。

●人を注ぐとは～【ヨコの発達】の豊かさに響くものになる

・タテの発達とヨコの発達

『タテの発達』：できないことが、できるようになること
数値化・見える化でき、客観的に評価しやすい

『ヨコの発達』：今できていることが広がること
目には見えにくく、こころや内面に关わるもの
☞感情の豊かさ、関係性の広がりなど、
誰にでもある「自分らしさ」に繋がっていくもの

- ・『発達』というと、「タテ」への伸び・高次化のイメージを持たれやすいが、
 - ☞ヨコへのふくらみが発達を引き上げるのであって、タテはヨコの結果になる。
発達は、個の中だけでは難しく、他者との関係性の下で現れる。
 - ☞この広がりには、自分があるのままだに受け入れられることをベースに、自分と他者との中で何かを共有する世界・経験があることで、他者を受け入れる関係へと繋がっていく。

幼児期の育てのテーマ：『人を注ぐ』

- 人を注ぐとは、快の関わり・生のやり取りであり、社会性に向き合った療育活動そのもの。ただ、それは単に注げばよしというものではなく、そこにこそ「専門性」が横たわる。
- 専門性とは、知識や支援スキルを指すばかりでなく、「専門性は、人間性」に通じていく。一人ひとりの子どもの育ち・発達と向き合うとき、或いは、その個別性を目の前にしたときに揺れ迷い、戸惑いや葛藤といった自らの感情と対峙することを避けてはられない。そして、そこに向き合い続ける姿勢にこそ、専門家であろうとする軌跡がある。だからこそ、私たち支援者は、子どもを正しく理解しようとすることに弛まず、その子なりの育ちに焦点し、『今、この子に必要な支援』を選び取れる眼を持つことへの努力を惜しまずに在りたい。
- 療育、発達支援はマニュアルでは成り立たない。デジタルな働きかけでもない。『人が、人を、社会化していく』という丁寧な子育てなのだ。『明日会うあの子』との向き合いの中で、もう一つ快を。もう一つ丁寧に。そんな願いや支援者としての在り方が、『人を注ぐ』ことに繋がっていくのではないだろうか。



ご清聴

ありがとうございました

参考文献

- ▶ 白石正久・白石恵理子編『新版 教育と保育のための発達診断 上 発達診断の基礎理論』, 全国障害者問題研究会出版部, 2022年。
- ▶ 滝川一廣『子どもとあゆむ精神医学』, 日本評論社, 2024年。